4　劒沢支流・北峰ルンゼ（昭和45年8月3日～8月5日）

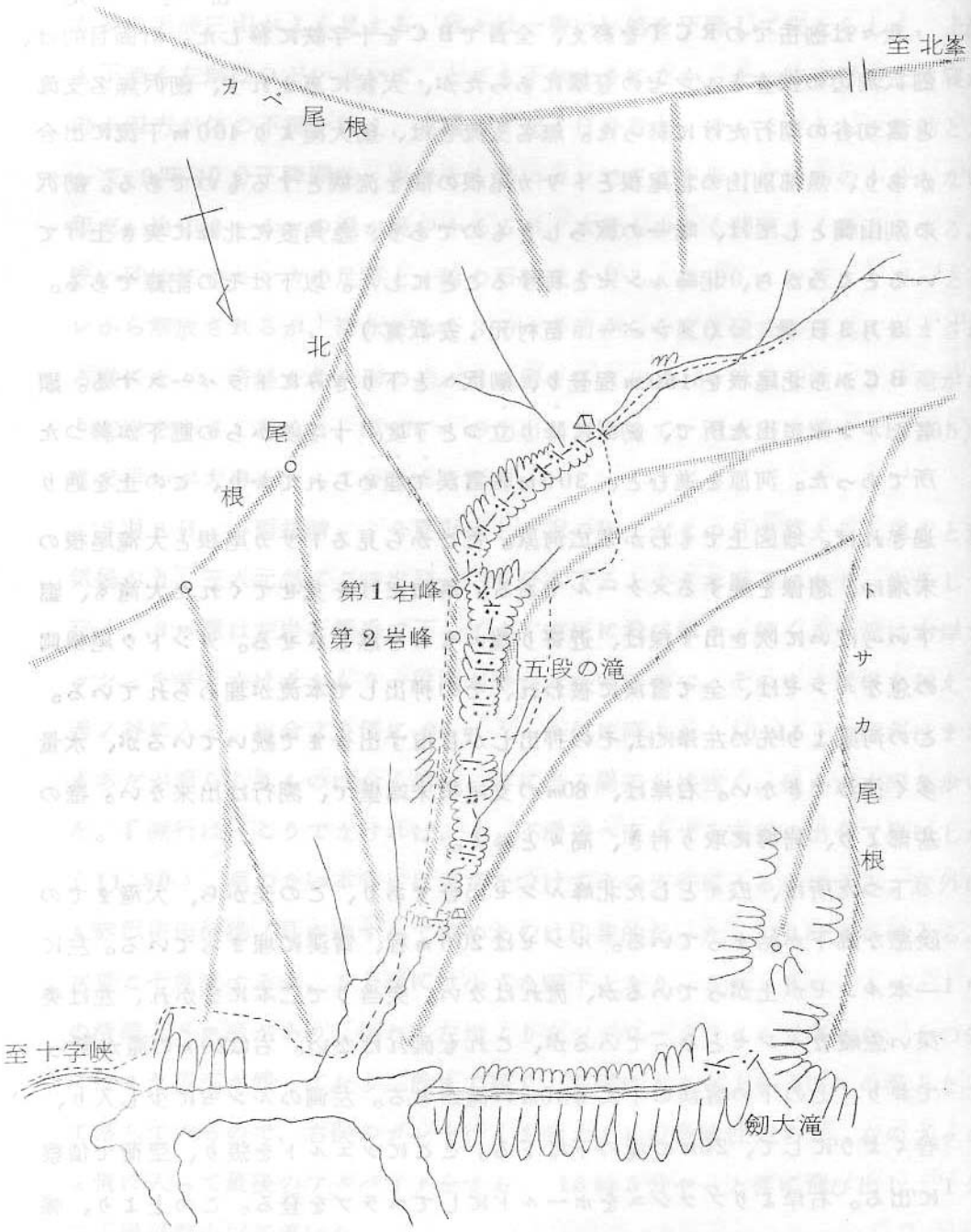
苗村　元

我々は劒岳でのＲＣＴを終え、全員でＢＣを十字峡に移した。計画目的は、劒沢周辺の探査とルンゼの登攀にあったが、天候に恵まれず、劒沢無名支流と雲切谷の溯行だけに終った。無名支流とは、劒大滝より400ｍ下流に出合があり、黒部別山の北尾根とトサカ尾根の間を流域とするものである。劒沢の別山側としては、唯一の沢らしきものであり、急角度に北峰に突き上げているところから、北峰ルンゼと称することにした。以下はその記録である。

8月3日曇　（メンバー　苗村元・安沢寛）

ＢＣから北尾根を150ｍ程登り、劒沢へと下りぎみにトラバースする。顕著なルンゼに出た所で、劒沢に降り立つと丁度、十字峡からの廊下が終つた所であった。河原を進むと、300ｍ程雪渓で埋められており、この上を通り過ぎれば、地図上でもわかる広河原。ここから見るトサカ尾根と大滝尾根の末端は、想像を絶するスケールである。落口だけを見せてくれた大滝も、廊下いっぱいに吹き出す様は、近寄り難いものを感じさせる。ガンドウ尾根側の急なルンゼは、全て雪渓に被われ、その押出しで本流が埋められている。この河原より先の左岸には、その押出しが目指す出合まで続いているが、水量多く徒渉できない。右岸は、80ｍの支尾根末端壁で、溯行は出来ない。壁の基部より、岩溝に取り付き、高々と巻く。

下つた所は、広々とした北峰ルンゼ出合であり、この先から、大滝までの険悪な廊下が始まっている。ルンゼは200ｍ程、雪渓に埋まっている。左に一本ルンゼが上がっているが、流れはない。突当りで二本に分かれ、左は奥深い急峻なルンゼとなっているが、これも流れはない。右は20ｍの滝が懸っており、その下の雪渓の中にも30ｍの滝がある。左側のルンゼに少し入り、巻くようにして、20ｍの滝の下に下る。ここにツエルトを張り、空荷で偵察に出る。右岸よりブッシュをホールドにしてスラブを登る。この上より、幅2ｍたらずの廊下が始まっており、すぐ二段10ｍの滝。引き返して、右岸の小ルンゼから、ブッシュにつかまって、さらに上へ。小テラスに出ると、五段45ｍの滝である。二段目からは登れそうだが、一段目はハングしていて、



黒部別山北峯ルンゼ

手のつけようがない。この滝から20m下流に、20mの滝。スラブで大きな庇を持った滝である。これより下が、極端に狭くなっていて6mの滝を隔て、先程の10mの滝へと続いている。高度を稼いでいるのは正味滝だけで、いわば大きな階段である。快適な滝登りは望めそうもないことを知って、テントサイトへ戻る。

BC(8:20)出合(11:00)—(11:45) テントサイト(1:30)—(3:05) 五段の滝—(3:25)テントサイト。

8月4日曇　五段の滝下まで、一気に巻く。左岸の草つきから、本流と平行して走るルンゼに移り、この滝のはるか上に出る。五段の滝の真上に、尾根が一本降りてきており、壁をもっている。この前で二股となり、右股は流れがない。左は岩溝状30mの滝で、その上部は尾根に隠れて見えない。ネックになっていて、急角度に折れている。石を蹴り落し、その音でこの場所からは下れないことを知る。さらに大きく巻いて、右股の空沢へ下り、さらに次の尾根に登ると、眼下に雪渓を発見した。高度にして、1650m~1700mにかけてのものである(出合は1050m)。雪渓下端に降り、上部を偵察。期待はずれにも空沢で、草つきから樹林の中に消えていた。北峰まで遠くはないが、無駄足とみて引返す。結局、この雪渓が水源になっており、これが消えでもしたら、水量はほとんどなくなるだろう。雨が降り出したので雪渓下端にビバーク。

出発(7:20)—(8:45) 五段の滝(9:10)—(12:20) 上部雪渓—(2:00) 雪渓下端。

8月5日曇　昨日のネックの所まで下ることにする。雪渓より落ちる滝は懸垂で下る。階段状の滑滝が2個あって、すぐに狭い廊下へストンと落ちる15mの滝。この落口から左岸バンドを伝って尾根に出る。右岸は廊下を形成する40mの壁である。尾根上をブッシュにぶらさがって降りて行き、10mのスラブの滝の落口へ下る。上流の15m滝との間には、同じような10m

のスラブの滝がある。

落口より懸垂で降りると例の岩溝状の滝の落口であった。そこより右岸の尾根に取付き鋭い岩峰に登ると展望台のようなテラスがあり、あたりの地形が手にとるようにわかった。この尾根は、両側に深い谷を持ち、尾根自体も、出合に向って急激に落ち込んでいるので、高度感は満点である。出合に向ってブッシュをたよりに下ると、次の岩峰との間の誠に狭いコルに達した。第二の岩峰は、かぶりぎみに、もろい岩を張り出している。このコルから左へ下れば、例の五段の滝下へ降りることになるが、垂直に近い草つきのルンゼである。ハーケンをスタンスにし、荷をつり上げて岩峰に立った。これより下は、スラブとブッシュの急斜面で、懸垂を交え、ブッシュにぶらさがりながら下る。一気に先日のビバークサイトまで降り、一息ついて無事ＢＣへ戻る。

出発（7:30）－第一岩峰（10:20）－第二岩峰（11:10）－（2:40）ビバークサイト（3:10）－（5:40）ＢＣ。

Ⅳ. 北の山・南の山

1 (1) 屋久島（1963年3月）

和田徳之

２月２８日晴。　19:05発鹿児島行急行「霧島」にて５名大阪を出発。ＯＢ、現役、山岳部の見送りをうけて屋久島へ。

２月２９日晴。　鹿児島駅には小野氏、中野、永森が迎えに来ていた。今晩船は出航しないとのこと。それで旅館にいったん落着いてから鹿児島、九州、折田汽船へ出航日をたしかめに行く。その結果、第三日目とやらで三会社とも明日は休航日、また一日無駄にしなければならないはめとなった。

３月１日雨。　小雨降る鹿児島の町を散歩などして時間をつぶす。